

SPECIAL ISSUE : 地域に学ぶ観光教育・研究の実践
観光フォーラム

観光学部 LIP 体験教育旅行&夏学習「夏旅!」

～教育学部・泉大津市&日高川町・和泉市 & かつらぎ町との連携事業をふり返って～

LIP “Natsutabi !” - Experiential Education Travel & Summer Learning Program in the Faculty of Tourism: Review of the LIP Programs cooperated with the Faculty of Education, Izumiotsu city & Hidakagawa town, and Izumi city & Katsuragi town (LIP: Local Internship Program)

中串 孝志¹、東 悦子²

Takashi Nakakushi, Etsuko Higashi

1 和歌山大学観光学部元准教授、甲陽学院中学校・高等学校教諭

2 和歌山大学観光学部教授

キーワード：地域間交流、学部連携、小学生、大学生

Key Words : Inter-regional exchanges, Collaborative project between the Faculties, Elementary school students, University students

Abstract :

The Faculty of Tourism offers Local Internship Programs (LIP) in partnership with local governments in Wakayama, southern Osaka and other parts of Japan. The aim is for students to visit local areas and research issues and problems arising in the community (<http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/en/internship/lip.html>). As one of them, LIP “Natsutabi” was started in 2017, however, this program differs in many ways from the conventional LIPs.

It is also positioned as one of the projects of a university-wide organization called “Experience Education Travel & Summer Learning program”, which was a two-day or three-day experiential education trip for elementary school students. This is a consist of two collaborative projects; one is among Hidakagawa Town, Izumiotsu City and Wakayama University started in 2017, and the other is among Izumi City, Katsuragi Town and Wakayama University since 2018. Under the framework of the LIP, students of the Faculty of Tourism promoted the project with students of the Faculty of Education taking advantage of the learning characteristics of each faculty.

The purpose of this study is to elaborate the three-year programs of this project for the following three points. (1) Sharing detailed program contents as a record, (2) Considering the characteristics of differences from other LIPs, (3) Considering what university students of the Faculty of Tourism have learned through such collaborative project.

I. はじめに

「体験教育旅行&夏学習」は、2016年4月に設置された全学組織である和歌山大学クロスカル教育機構 教育・地域支援部門が実施する事業のなかに「地域支援学校」とともに位置づけられ、和歌山大学第3期（平成28～33年度）中期目標前文に掲げる「実践的な課題に触れる「地域と融合した深い学び」により、柔軟な社会性と対人関係力を養い、地域に誇りを持ち、地域社会に貢献する人材を輩出する」を実現するものとされている（和歌山大学 クロスカル教育機構 教育・地域支援部門 2018「はじめに」）。

このような全学的組織の事業の一つとして、「体験教育旅行&夏学習」は、2017年に大阪府泉大津市と和歌山県日高郡日高川町との友好都市連携に基づく相互交流事業を土台とし、泉大津市と日高川町の小学生を対象とした、日高川町における2泊3日の体験教育旅行（通称「夏旅」）として開始された。和歌山大学教育学部と観光学部の学生が各学部での学びの特性を活かして、同事業を推進する。具体的には、教育学部は「教育ボランティア」の一環として、観光学部では地域インターンシッププログラム（Local Internship Program: LIP）の枠組みにのっとり学生を募集し、事前研修、夏旅（宿

泊を伴う体験教育旅行)、事後研修を通して時間管理を行い、単位認定を行ってきた。

LIP は、2008 年度の観光学部設置とともに開始されたフィールド実践型教育プログラムの一つである。和歌山県内及び大阪南部の市町村などの協力のもと、地域が抱える課題を地域住民とともに発見し、その解決方法を考えるものである。活動報告書(和歌山大学観光学部観光実践教育サポートオフィス、2019)によると、地域活性化に関心を持つ学生が、現地に足を運び、地域住民と連携することによって地域の課題や調査活動に取り組むもので、「学生と地域を活性化したい」、「地域の魅力を発見したい」といった地域からの提案を受け、毎年複数の活動を実施している。2011 年度より従来の公募によるプログラムに加え観光学部専任教員からの申請により実施される方式が導入されプログラム数が安定したこと、2012 年度より単位認定がなされる授業として開講されるようになったことなどを機に参加者数も増え、2019 年度末までの 12 年間で延べ実施件数 129 件、延べ参加学生数 1,441 名となった。観光学部のカリキュラムの特色として「ケーススタディやフィールドワークを駆使した理論と実践の融合教育を実施する」ことが学部設置当時から掲げられているように(和歌山大学観光学部、2017)、LIP は設立当初から現在までそのカリキュラムの中で重要な位置を占め続けている。

先述のように本プログラムは、日高川町及び泉大津市と和歌山大学の連携事業、また 2018 年からは和泉市及びかつらぎ町も加わった和歌山大学との連携事業であるとともに、大学内においては教育学部と観光学部の連携事業でもあった。これは従来の LIP プログラムとはさまざまな点で異なるプログラムであったことから、本稿では次の 3 点を目的として、本事業の 3 年間の取り組みを整理したい。(1) プログラムの内容を詳述し、記録として共有すること、(2) 他の LIP との違いによる特

徴(利点や課題)を考察すること、(3) 学部横断事業および小学生(児童)を中心とした活動を通して、大学生が何を学ぶことができたかという点を考察することである。

Ⅱ. 3 年間の取り組みの概略

2017 年(事業初年度)は、大阪府泉大津市と和歌県日高川町の友好都市連携に基づき、日高川町において LIP 体験教育旅行&夏学習(以下、夏旅)を実施し、2018 年には、和泉市とかつらぎ町の友好都市・親善こども会交流会に基づく連携事業として、同 LIP において、和泉市・かつらぎ町のプログラムも開始された。その年は、事前準備を行っていたものの、台風接近のために和泉市・かつらぎ町の交流会は実施することができず、泉大津市・日高川町のプログラムのみの実施となった。3 年目となる 2019 年度は、新たに学生募集を行い、8 月 19 日～21 日の日程で日高川町にある「きのくに中津荘」において、その後、8 月 22 日～24 日の日程で和泉市立青少年の家において、それぞれに夏旅が実施された(表 1)。

1. 2017 年度 活動内容

初年度は泉大津市・日高川町プログラムのみの実施であった。参加学生数は計 19 名で、観光学部学生は 10 名(内 1 名は当日不参加・準備のみの参加)で、教育学部学生は 9 名であった。児童の参加数は計 24 名で、泉大津市から 17 名、日高川町から 7 名であった。この年、観光学部から中串と東も引率した。

教育学部教職大学院教員(岡崎裕)による教育学部生との合同による事前研修が定期的に開催され、教育学部および観光学部教員も参加した。プログラム中のアクティビティはそれぞれ観光学部・教育学部の学生が数名ずつのグループを組んで担当し、企画や準備はグループ毎に両学部生が協働して

表 1 事業概要

和歌山大学における事業名／ 観光学部 LIP プログラム名／ 地域間交流名あるいは事業名	3 年間の実施日	実施場所	参加者の構成
和歌山大学クロスカル教育機構 教育・地域支援部門「体験教育旅行&夏学習」／LIP 夏旅(日高川)／「大阪府泉大津市と和歌県日高川町の友好都市連携」	・2017 年 8 月 17 日～20 日 ・2018 年 8 月 19 日～21 日 ・2019 年 8 月 19 日～21 日	きのくに中津荘 (和歌山県日高郡三百瀬)	・和歌山大学教育学部教員および学生、同観光学部教員および学生 ・泉大津市教育委員会 ・日高川町教育委員会 ・泉大津市小学生児童 ・日高川町小学生児童
和歌山大学クロスカル教育機構 教育・地域支援部門「体験教育旅行&夏学習」／LIP 夏旅(和泉市・かつらぎ町)／「和泉市・かつらぎ町友好都市・親善こども交流会」	・2018 年 中止 ・2019 年 8 月 22 日～24 日	和泉市立青少年の家 横尾山グリーンランド (大阪府和泉市横尾山町 1-21)	・和歌山大学教育学部教員および学生、同観光学部教員および学生 ・和泉市教育委員会 ・かつらぎ町教育委員会 ・和泉市青少年リーダー会 ・かつらぎ青少年リーダー会 ・和泉市小学生児童 ・かつらぎ小学生児童

自主的に行なった。また適宜、観光学部生のみの LIP 夏旅としての事前・事後研修も行った。大まかには、教育学部生が中心となり屋内での学習プランを立て、観光学部生が中心となり野外活動のプランニングを行うこととした。実施にあたっては、両学部生が共に活動の中心となり小学生を指導あるいは支援した。

当日のスケジュールを図 1 に示す。翌年度以降もこのスケジュールを踏襲している。泉大津市の児童は初日の午前中にバスで移動し（泉大津市職員が添乗）、きのくに中津荘にて全員が顔を合わせての昼食からプログラムがスタートする。その後、事前に学生が企画していたアクティビティが順次実施される（図 2）。屋外での自然体験、屋内での学習、レクリエーションと様々なアクティビティが、教育学部生と観光学部生の協働により企画・実行された。企画時には目標、時間中の展開（タイムテーブル）、台本、準備物、懸念される事項等々を明確化し文書にまとめ随時報告することが求められた。自然体験には近隣にあるリフレッシュエリアみやまの里森林公園内にある日本一長い藤棚として知られる藤棚ロードから椿山展望台までのハイキングも行われた（図 3）。2 日目の「夜学習」は気象条件が良ければ天体望遠鏡による観望会、悪ければ屋内でのレクリエーションが企画されており、実際には後者が実施された。

2. 2018 年度 活動内容

前年度に実施された泉大津市・日高川町プログラムに加え、2018 年度より、和泉市・かつらぎ町プログラムが開始された。

日付	時刻	日高川児童	泉大津児童	和歌山大学生
8月17日	8:30		市役所前集合	
	9:00		泉大津出発	
	10:00			現地集合・準備
	11:00	合流		
	12:00	開校式・昼食・チーム編成	開校式・昼食・チーム編成指導	
	13:00	アクティビティ1 自己紹介	アクティビティ1指導	
	14:00			
	15:00	アクティビティ2 自然体験①	アクティビティ2指導	
	16:00			
	17:00	チェックイン・入浴（一部帰宅）	チェックイン・入浴	打ち合わせ
	18:00		夕食	
	19:00	アクティビティ3 室内ゲーム（または星観察）	アクティビティ3指導	
	20:00			
	21:00	就寝	入浴	
	22:00		反省会	
日付	時刻	日高川児童	泉大津児童	和歌山大学生
8月18日	7:00	起床・朝の活動（散歩など）	起床（6:30）・活動指導	
	8:00	朝食	朝食指導	
	9:00			
	10:00	朝学習（「地域紹介」を含む）	朝学習指導	
	11:00			
	12:00	昼食	昼食指導	
	13:00			
	14:00	アクティビティ4 自然体験②	アクティビティ4指導	
	15:00			
	16:00			
	17:00	夕食（バーベキュー）	夕食指導	
	18:00			
	19:00	夜学習（星観察または室内ゲーム）	夜学習指導	
	20:00	入浴（一部帰宅）	入浴	
	21:00	就寝	入浴	
	22:00		反省会	
日付	時刻	日高川児童	泉大津児童	和歌山大学生
8月19日	7:00	起床・朝の活動（散歩など）	起床（6:30）・活動指導	
	8:00	合流	朝食	朝食指導
	9:00			
	10:00	朝学習	朝学習指導	
	11:00			
	12:00	昼食・開校式・お別れの会	昼食・開校式・お別れの会指導	
	13:00	帰宅	日高川出発	反省会
	14:00			
	15:00			
	16:00	泉大津市役所解散	解散	

図 1 2017 年度泉大津市・日高川町プログラムの当日のスケジュール



図 2 2017 年度のアクティビティの様子。（上）アイスブレイク。（下）夕刻のアクティビティでのグループ発表。残像撮影アプリケーションソフトをインストールした iPad のカメラを用い、屋外でカラーライトを動かして文字や図形を描いた。

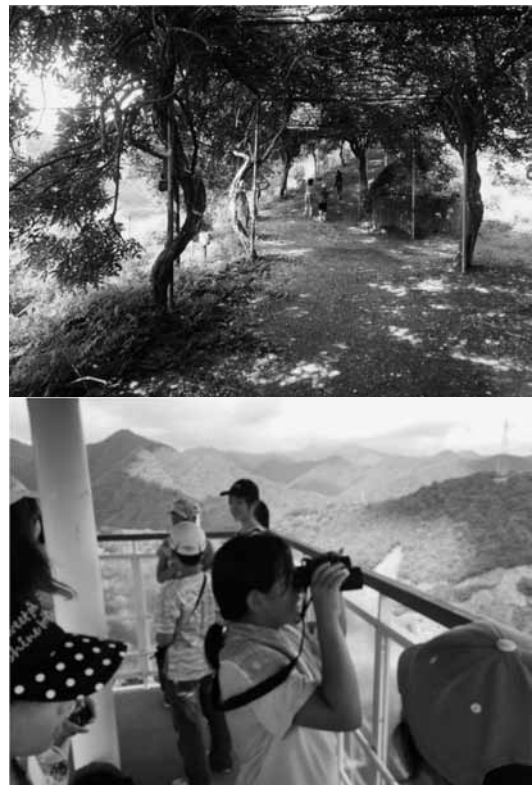


図 3 2017 年度のハイキング。（上）藤棚ロード。（下）展望台最上階。

さらに日高川町における農業体験・環境学習も行われた。前年度同様、観光学部生・教育学部生が協働して内容の企画・準備・当日の運営を行なった。事前研修は5月10日(木)にスタートし、岡崎を中心に、ほぼ毎週木曜日昼休みに実施された。実施内容の具体的な企画・準備以外にも、テレビ会議や現地視察も行われた。プログラム全体の参加学生数は42名で、観光学部からは1回生を中心に13名であった。

泉大津市・日高川町プログラムは8月19日(日)～21日(火)に開催された。観光学部からは中申が引率に加わった。実施された内容は、前年度と異なるアクティビティもあるが、枠組みは前年度を踏襲している。この時の夜学習では日高川町から貸し出された天体望遠鏡2台を観光学部教員(中申)が設置・操作し、児童だけでなく学生・教職員も含めたミニ惑星観望会を開くことができた。

和泉市・かつらぎ町プログラムは8月23日(木)～24日(金)に予定されていたが、台風接近のため中止を余儀なくされた。観光学部から教員1名(東)が引率に加わる予定であった。

日高川町における農業体験・環境学習は10月20日(土)に実施された。

事後研修は10月から1月30日(水)まで計5回実施された。事後報告書の作成を通して、各自が研修内容を振り返り、さらに今回のLIPの改善点について討議された。

3. 2019年度 活動内容

LIP夏旅は2019年度で3年目となった。泉大津市・日高川町プログラムでは、教育学部生とともに5名の観光学部生が参加し、和泉市・かつらぎ町プログラムは、観光学部生9名が参加した。その内1名は両プログラムに参加した。担当教員は教育学部7名(全行程担当者と部分的な引率担当者を含む)と観光学部教員2名であった。前年度同様、中申と東がそれぞれ1件のプログラムの引率を担当した。

例年同様に、観光学部生と教育学部生との合同による事前研修が実施され、両プログラムにおけるアクティビティの企画や準備は担当グループに分かれて、学生が自主的に準備した。また適宜、観光学部生のためのLIP夏旅としての事前・事後研修も必要であった。担当教員がLIPプログラムの単位認定に必要な時間管理票の作成などについて説明を行った。また学生の事前準備の状況を聞き取り、教室手配やアクティビティの内容について必要に応じて支援及び助言を行った。

2019年度は、新たな試みとして、観光学部では2020年2月8日(土)にLIP合同報告会が開催された。参加した学生たちは発表用パネルとプレゼンテーションをまとめ、代表の数名が壇上に登った。また連携事業としても3月6日(金)に報告会「教育実践による地域活性化事業フォーラム」¹におけるテーマ別発表での報告及びポスターセッションが予定され、1月23日(木)にはフォーラムに向けて第1回発表練習を行うとともに、それを踏まえて、フォーラム報告の原稿を完成

した。このように準備を進めていたものの、同年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、本フォーラム及び前日に予定していた第2回発表練習は中止となった。

(1) 泉大津市・日高川町プログラム

本プログラムは、2019年8月19日(月)～21日(水)にかけて、きのくに中津荘及びその周辺にて実施された。学生参加者23名中、観光学部からの参加者は5名(1年生4名、2年生1名)であった。担当教員は教育学部教員5名と観光学部1名(中申)であった。予定していたスケジュールは過去のものとおおよそ同様のものであるが、直前の台風の影響が心配された上に、当日も天候に恵まれず、ほぼ全スケジュールを両プログラムで進行せざるを得なかった。

初日は、現地で全員集合・昼食の後、屋外アクティビティの場所である水辺公園には行くことができたものの、途中で小雨が降り出し雷が鳴り始めたので途中で引き上げ、続きの工作との組み合わせのアクティビティ(図4)以降は両プログラムでの進行となった。以後も最終日の解散まで多くが両プログラムないし屋外での活動を省いたものとなった。2日目午後の藤棚ロード～椿山展望台ハイキングも、登山口近くまでは行ったものの天候不順が予想されたため、一旦近隣の体育館で待機した。時間の問題もあり、椿山展望台ハイキングは諦め、ほど近い椿山ダム湖内の「グリーンパークつばやま」内にある、山彦が楽しめる「ヤッホーポイント」へのミニハイキングに変更した(図4)。夜学習では、準備はしたものの天体観望会を実施できなかった。

(2) 和泉市・かつらぎ町プログラム

本プログラムは、8月22日(木)～24日(土)にかけて、和泉市立青少年の家において実施された。教員免許状取得に必須のセミナーと日程が重なったため教育学部生の参加はなく、観光学部生9名(全員1年生)が参加し、教育学部教員複数名と観光学部教員1名(東)が加わった。同事業は、和泉市・かつらぎ町友好都市・親善こども交流会として、開催地を交代しながら実施されてきた経緯があった。2019年度は同交流会に和歌山大学も加わり、これまで中心となって事業を遂行してきた両地域のリーダー会のメンバーとともに、学生たちはスタッフとして参加児童の活動内容の一部を企画し遂行した。

児童は1泊2日の行程での参加で、その2日間のプログラムは表2の通りである。一方、学生たちは、前日の準備を含む2泊3日の行程で参加し、8月22日に活動の場である和泉市立青少年の家にて、和歌山大学教員、和泉市並びにかつらぎ町教育委員会やリーダー会の方々と合流した。まずスタッフ間のアイスブレイクがあり、その後、翌日からの交流会のスケジュール確認及び各グループが企画し準備したアクティビティについて内容を共有するために担当学生が説明を行っ



図4 (上) ヤッホーポイント遠景。手前の「椿山レイクブリッジ」を渡し、蛇行でできた半島状の部分の先端にグリーンパークつばやまがある。(下) ヤッホーポイント。道の途中の児童が集まっている場所から画像の右方向に向かって叫ぶと山彦が返ってくる。2019年度泉大津市・日高川町プログラムより。

た。それについては、リーダー会の会長から指導や助言を受け、その後、学生たちはアクティビティの進め方について夜遅くまでシミュレーションを行い、児童を迎えるために、不十分な点を調整して当日に備えた。

表2 和泉市・かつらぎ町プログラム 2019年度スケジュール

8月23日 交流会 1日目スケジュール	8月24日 交流会 2日目スケジュール
9:00 現地集合	6:30 起床・洗面
9:30 かつらぎ町参加者到着	7:00 朝の集い
10:00 歓迎式・仲間づくり	7:30 朝食
12:00 昼食	8:30 掃除
13:00 プログラム①、②	9:00 プログラム④、⑤
16:00 野外炊事	11:30 昼食 片付け 記念品づくり
18:00 夕食	13:30 閉会式
19:30 プログラム③ (キャンプファイヤー)	14:00 かつらぎ町退所
20:30 入浴・就寝準備	14:30 解散予定
22:00 消灯	

「令和元年度 和泉市・かつらぎ町 友好都市・親善子供会交流会 ようこそ和泉市へ」スタッフ用しおりに基づき作成。

本プログラムはこれまでに実施されてきた実績があり、交流会の運営は和泉市とかつらぎ町のリーダー会の会長および中学生や高校生が中心となり、初めて参加する大学生はサポート役を担ったが、そのうち8月23日のプログラム①・②と④・⑤(それぞれ同時に行われる2種類の活動)のアクティビティは、大学生が企画と準備を行い中心となって進行した。また屋内用と野外用のアクティビティも用意し雨天にも備えた。具体的には、「ワイヤーゲーム」「ペットボトルボーリング」「おおなわ」「ジェスチャーゲーム」「新聞の上に何人乗れるかゲーム」「水鉄砲」「山登りプログラム」などであったが、夏旅本番でさまざまな状況から実施しなかったアクティビティも含まれる。写真(図5(上)(下))は、アイスブレイクの様子、及び折り紙の縄で大縄跳びを楽しんでいる様子である。

本プログラムでは、泉大津市・日高川町プログラムと異なる活動として、野外炊事があった。これに関しては、数名の学生が事前にリーダー会の野外炊事(カレー作り及び飯盒炊飯)に参加し、その経験を共有したうえで当日に臨んだ。

いずれの活動においても、日頃からトレーニングを積んでいるリーダー会の方々や教育委員会の方々、また教育学部教員の支えがあり、学生たちは無事に活動を終えることができた。



図5 2019年度和泉市・かつらぎ町プログラムの様子

(上) 児童を迎えてアイスブレイクが始まった。

(下) 安全に配慮して「大縄跳び」では折り紙のリングで作った縄を使用。

Ⅲ. 考察：他の LIP との相違点と特徴

本プログラムは、観光学部としては LIP の一つであるが、他の LIP とは異なり、学部連携プログラムの要素が大きい。本プログラムの骨格は教育学部が予め作った状態で観光学部が後から加わった形に近い。そのため体験教育旅行の主題も教育学部の観点からの要素が色濃い。即ち、プログラムに参加する小学生、つまり大規模校と小規模校の児童たちと、彼らの出会いと交流が主たる目的に掲げられていた。

参加児童にとっての体験教育旅行は、泉大津市や和泉市の小学生にとっては、山や川、緑あふれる地域で自然を満喫する機会である。一方、少人数学校に在籍する日高川町やかつらぎ町の児童たちには、日ごろ取り組むことができない集団でのアクティビティを体験できる機会である。いずれの地域の児童も、日頃味わうことができない、非日常の環境に身を置くことにより経験の広がりを持つこととなり、自身には当たり前のことが、他者にとってはうらやますべき自然環境あるいは教育環境であるという点に気づくという、交流の鏡効果が期待できるプログラムとなっていたといえる。

運営体制もそれに合わせた形で設計されており（図 6）、交流の主体となるのは児童で、彼らを取り巻く大学生が指導や支援にあたり、さらにその外周にあたる部分に町、市、大学の教職員が位置して適宜進行や助言を行う形になっている。

運用面に関しても「学部を越えた連携」は他の LIP にない特徴である。連携を十分に機能させるためにはプログラムの目的をどのように設定するかが重要である。これにはプログラムの目的を学部共通で設定しておくのか、学部ごとに設定しておくのか、の 2 通りが考えられる。共通に目的を設定するとすれば、

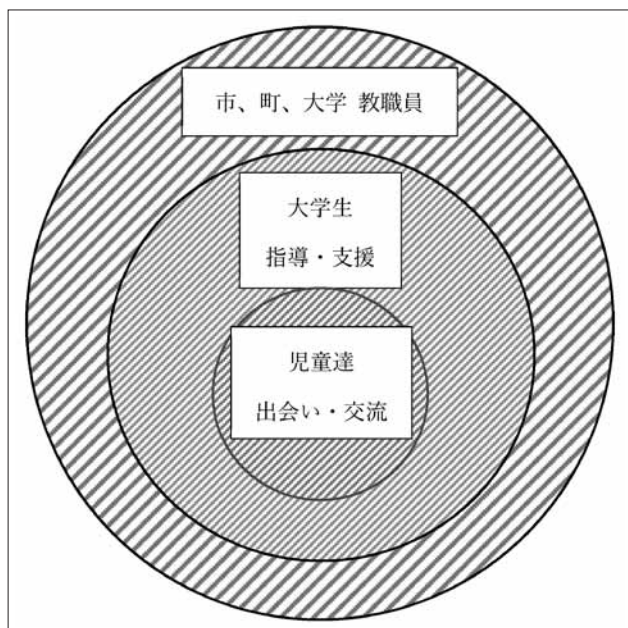


図 6 本プログラム実施体制・役割の概念図

「平成 29 年度『「体験教育旅行&夏学習」「地域支援学校」研究報告書』」39 頁より引用。

学部間の教育内容の違いもあり、さまざまな点において不自由さや不便さも想定されるため、後者がより良い選択であろうと考えられ、実際にそのように運用されていた。しかし本事業では、「観光学部から見たこの事業の目的」が曖昧なままであったため、観光学部生を見ていると「観光学部と違うことをしている」ことに戸惑っている様子が見ええた。換言すると何を求められているかがピンときていない様子であった。これはプログラムの目的の明確化が観光学部（の学生）にとって不十分であったことを示している。本来ならば本事業を観光学部 LIP として運営することが企画された段階で、教育学部の観点ではなく LIP の観点からの独自の目的が設定されるべきであった。これは大きな反省点と言わざるを得ない。本事業は 2020 年度で終了となる予定であるが、今からでも LIP としての目的を検討しておくことは、将来、本プログラムに類似の内容の LIP が実施される際の参考になる。検討の際には、中心的に指導にあたった岡崎の言葉「田舎の子供達にとっては、何をするかよりも、子供達が（たくさん）来る、ということ自体がものすごく刺激になる」という点、このような中山間地域の感覚を学ぶこと自体が観光学部の LIP としての目的を考えるための出発点といえるだろう。また、本事業における我々のこの反省点は、「学部を越えた連携事業」を行う際にはこのように「事業全体としての目的を共有すること」とは別に「各学部独自の視点での目的を設定すること」が一般的に必要でありかつ重視されるべきであることを示しているかもしれない。

以上、運営・運用の面から本事業の特徴をまとめ、観光学部 LIP としての目的の在り方においてふり返った。本事業の運営・運用においては、さまざまな機関とそこに所属する全員の特性がうまく活かされてこそ機能する事業であったと捉えられる。

Ⅳ. 考察：大学生の学びについて

ここでは、事業において中核をなす夏旅（体験教育旅行）を通して、観光学部生が何を学ぶことにつながったのかを考察したい。その資料としては、夏旅参加後に作成した 2019 年度『「体験教育旅行&夏学習」「地域支援学校」研究報告書』に記述された学生のレポートを用いる。同年度を取り上げるのは、和泉市・日高香川町と和泉市・かつらぎ町の両プログラムが実施された初めての年であったからである。泉大津市・日高川町に参加した学生の記述を取り上げる場合は、H-a、H-b のように示し、和泉市・かつらぎ町に参加した学生については、K-a、K-b のように示すことにする。また記述中の個人名は適宜 A さん、B さんのようにアルファベットに置き換えた。なお、「子ども」「子供」などの表記の違いは原文通りである。

学生のレポートにはほぼ共通してみられる記述内容をまとめると、(1) 事前準備の重要性についての認識 (2) 小学生と実際に接することからの気づき（児童とのかかわり）、(3) 教育

表3 研究報告者『「体験教育旅行&夏学習」「地域支援学校」』平成29年度、平成30年度、2019年度における学生のレポート数

事業地域名	レポート数			
	上段は研究報告書に記された年度(西暦年度)	平成29年度(2017年度)	平成30年度(2018年度)	2019年度
日高川町・泉大津市	観光学部	6(活動グループごとにまとめられた共著)	3(単著) 1(共著)	5(単著)
	教育学部		5(単著)	19(単著)
かつらぎ町・和泉市	観光学部		台風の為中止	9(単著)
	教育学部		4(単著)	0

筆者作成

※共著のレポートもあるため、参加者数と一致しない年度もある。

※平成30年度かつらぎプログラムは台風接近のために中止になったが、教育学部生4名が事前準備や他のセミナーに参加したことに触れてレポートを書いている。

学部生やリーダー会のメンバーから学ぶこと(他者からの学び)、
(4) 本プログラムへの参加から学生自身が実感したこと(体験的気づき)であった。これらの観点を中心に考察を試みたい。

さらに、学部特性による違いがあるのかについては、将来、教員を目指していることが想定される教育学部生の研究報告書のうち、日高川町・和泉大津市プログラムにおける事後レポートをみてみることにする(後述(5)(6))。その理由は、日程の関係から、2019年度に実施されたかつらぎ・和泉プログラムへは教育学部生は参加がかなわず、観光学部生のみ参加となっているためである。表3は、研究報告書に掲載されたレポートの数を示したものである。

(1) 事前準備の重要性についての認識

H-a: (ミーティングに十分に出席できなかったことや、LINEなどのツールを用いて積極的にコミュニケーションを図ることができなかった自身を振り返り、「報告」「連絡」「相談」これら全てが抜け抜けであったために準備不足を心の底から感じるようになりました。【事前研修における自身の活動への参加姿勢】

H-b: この時の反省点は、話し合いの段階で、班員とカラーペンやはさみ、カッターなどの必要な個数を確認することを怠ったままの準備不足が挙げられます。【必要物品の準備確認】

K-a: 今回の経験を通して得たことが2つあります。まず1つは事前準備の大切さです。当たり前のことですが、前段階であらゆることを想定して綿密にプログラムの計画をするべきですし、プログラム自体の内容をしっかりと考えるべきです。(略)次につなげるために反省点をあげるならば、情報共有が甘かった点とメンバー全員が集まるのが少なかった点です。(略)不参加者から事前に意見を聞いておくなどの工夫はできた

ろうと考えます。【事前準備の必要性と改善方法】

K-f: 夏旅を実施するにあたって今回は事前準備の重要性を再認識する機会となりました。山の天気は変わりやすく、プログラムの変更や調整が必要となることが多々ありました。そのような事態に対応することができたのはあらゆる展開や場面を想定して準備を重ねていたからだと考えます。【事前準備の重要性、あらゆる展開の想定】

(2) 児童とのかかわりから

K-a: 教育学部の学生と異なり、普段からあまり子どもたちと関わる機会がない私たちには、オリエンテーションや計画を一つ一つより慎重に、安全に、子どもたちの目線から考える必要がありました。【児童の安全への配慮、相手意識】

K-b: 2日間を通して、わかりやすく物事を伝え、共有し、楽しんでもらうことの難しさを感じたとともに、様々な目線に立って、視野を広げ物事を考えることが重要であるとわかった。そして、今回の交流会の3日間で、地域を超えて楽しみ、最後には泣いてお別れする子供たちや、次は自分がリーダーになりたいと言う子どもたちを見て、地域を超えた交流のすばらしさを改めて感じた【相手を意識したコミュニケーション、交流活動の意義】。

K-c: これまでの宿泊研修は参加する立場であったが、今回は初めて催す立場で客観的に子供たちをみるという貴重な経験が出来た。ただただ自分がたのしみたら良いというわけではなく、子供たちみんなが楽しむにはどうすれば良いかを考えるようになった。【立場の違いと役割】

K-g: 一人でいる子への接し方。これはいまだに自分の中

で正解にたどり着いていない。(略) それぞれどんな理由で一人であるのか、どうしてみんなと行動しないのか、自分がよくその子を見て判断し、寄り添うことが大事であると考え。しかし、少しは強引に輪に入ってもらえることも必要なのかなと考えることもあった。これは、もっと子供たちと接する機会を増やして、また教育学部の方やリーダーさんを手本にして、経験を積んでいくことで正解が見えてくるはずである。【子どものかかわりから生じた問題提起】

(3) 他者からの学びについて

H-c: 観光学部は普段の学生生活で子供達と触れ合う機会ほとんどない。慣れない子供相手に苦戦することも多くあったが、教育学部の学生が子供を上手く扱っている姿から見習うことが多くあった。そのため観光学部・教育学部合同で行うプログラムは座学では得られない実践的に行動する良い機会だと考える。【児童への接し方の学び】

K-e: 次に、子供たちをどうしたら上手にコントロールできるかを学ぶことができました。今回のホストである A さん(リーダー会の会長)が掛け声を発して、それを子供たちに復唱させる。それだけで子供たちは話を聞く姿勢になっていました。これは子供たちに、静かになることとその掛け声を結び付けさせることで、注意することなく話を聞かせるテクニックだそうです。【集団のコントロール法】

(4) 学生自身の気づきや学び

H-b: 観光学部として、この夏旅に参加する目的は、様々な問題を抱えている現代社会の中でそれらの問題解決をする生涯学習力、また、さまざまな世代の人々とのコミュニケーションができる柔軟な社会性と対人能力を養うためでした。これにおいては、子供たちとの接し方を改めて考えることが出来たので、これから高齢者の方々とも関わっていききたいと思います【多様な世代間のコミュニケーション】。

H-d: 夏旅を通してたくさんの子どもたちと楽しくて充実した時間が過ごすことができ、大学生同士でも協力する場面が多く、助け合いながら仲も深められ、なにかを企画したり、すすめたりすることの大変さ、難しさを知ることができました。【協力・助け合い、企画・進行の難しさ】

H-e: 準備と本番を通して重要だと思ったことは、あらゆる事を想定し準備をすることです。自分たちが主体的に進めていくプログラムということは、責任の大きさを理解する必要があると感じました。企画、準備、下見、本番すべてにおいて十分に責任をもって準備をするべ

きだと思っています。ただ、子供と遊んで楽しむだけでは不十分であり、時には、厳しく指導する必要もあったり、そうしないと悲しむ子が出てきたり子供を危険にさらしてしまうことがあると学びました。自分になつてくれた子供にばかり気をとられているのではなく、全体を見る視野も必要だと思いました。【準備と責任、児童への接し方、広い視野の必要性】

K-c: 去年は台風のため実施ができず今回が初の実施となったので、(略) 過去の事例のない状態からこのように進めていく過程は企画力を養うのにつけて感じた。そしてこの能力は我々学生に大きくかけていた部分だと考えられる。【企画力の養成】

K-h: もう一つ夏旅にリーダーとして参加して気づいたことがあった。それはグループを動かす際、リーダーが皆が皆まとめ役に徹していると逆にまとまらず、子供たちが好き放題遊んでいるシーンがあった。したがって皆を全体的にまとめる表に立つリーダーと子供たちを個々にゆっくりと分析し、それぞれにあった対応を行う裏方のリーダーを作ることが効果的にグループをまとめる手段だと考えました。【リーダーの2つの役割】

以上、学生自身が夏旅の経験を通して、どのようなことを振り返り、何を学ぶことができたのかを整理してみた。予定通りに企画をすすめられなかった反省や児童が楽しんでもくれた企画者としての喜び、多様な年齢と経験を有する人々との関わりから得られる気づき、思い通りにいかないコミュニケーションのもどかしさや児童とのかかわりから明確になる自身の立ち位置等々、うまくいったという成功体験と反省せざるを得ない失敗体験が織り交ざるなか、学生達は、他者から教えられるのではなく、自らの吸収力をもってして、さまざまな事柄を学んだのではないか。これこそが、学生をキャンパスの外の世界である地域に送り出す意義の一つであったといえる。

次に、教育学部生の記述について述べる。学生の記述を抜粋する際には、アルファベット E で表記し、その後、西暦の末尾2桁、全学生を a, b, c...のようにラベル化して表記する。2018年度にプログラムに参加した教育学部生 a さんの記述は、E-18-a となる。「子ども」「子供」などの表記の違いは原文通りである。

事業初年度である2017年度の研究報告書は、宿泊研修の活動グループごとに、企画の概要、実施の様子、振り返りを中心にまとめられている。これは次年度の事業実施への申し送りの意味合いも持つものであった。そのため、個々の振り返りをみるために、2018年度および2019年度の単著のレポートにおける学生の記述を確認した。

準備不足を振り返り、事前準備の必要性および重要性に言及している点や、児童の安全への配慮に関する記述には、

教育学部生と観光学部生に共通性が見られた。一方、教育学部生ならではの特徴としては、(5)「先生」あるいは「教師」という言葉がたびたび使用されていることで、2019年度の教育学部生の半数のレポートに見られた。将来の職業への意識が表出されているようで、(6)子どもへの指示や配慮についての振り返りなどにも、教育的な視点が窺えた。このような特徴を表している記述の一部を下記に例示する。

(5)「先生」としての姿勢・将来像としての「教師」

E-18-a: 教師は身に付けた知識と現場での経験がそろわなければならないのですが、大学生活の中で子どもと触れ合える機会というのはごく限られたものであります。ですから、現場での体験ができる今回のような企画に魅力を感じました。【教師に必要な体験】

E-19-h: …食事指導や就寝指導の際には「先生」として厳しめに接することができた。易しいときと厳しいときの切り替えをうまく行うことができたのは非常に良かったと考える。【先生としての姿勢】

E-19-j: 夏旅で子どもたちと過ごしていく中で、教師になるには教科書に載っていることだけでなく、それぞれに付随した知識も備えなければいけないと感じました。【教師の在り方】

E-19-k: 子どもとの触れ合いを通して、改めて教師の魅力を感じることが出来たのでよかったです。【教師の魅力】

E-19-m: 将来、先生になった時にも日常生活でも予想外のことがたくさん起こる。将来のためにも今出来る努力を怠らないようにしたいと思った。【教師になるための備え】

これらの記述例からは、宿泊研修を通して児童と接するか、教師という職業の魅力を実感し、体験を通して教師の姿勢やあり方を意識し、将来教師になるために自らが現在なすべき点は何かを認識した様子が窺える。

(6) 子どもへの指示・教育的配慮

E-18-b: (手作りプラネタリウムに言及して) …寝る前に部屋で手作りプラネタリウムを光らせていたり、うれしい出来事が多かった。この“興味・好奇”をしっかりと学びへ行かせるような手立てが、もう一段階必要だったのかどうかは悩みどころである。【教育的学びへの言及】

E-19-b: …ジャスチャーゲームは回答の仕方を改善すべきだと感じた。全体で挙手性だったため、回答者にばらつきがでていた。司会している側も誰を当てるか判断が難しかった。チームで一人ずつなど細か

くルールを設定すべきだった。【方法改善への気づき】

E-19-g: (言うことを聞かない子供を叱る時、食事の際に座らせる時) …私は子供たちを叱ることができずうまく子供を誘導することができなかった。【叱ることの難しさ】

E-19-g: (子供達と平等に接することの大切さに言及して) しかし話しかけたいけど話しかけられない子がいることに気づき自分から積極的に話かけることの大切さを感じた。子供達の思いに気づくためには、子供の様子をよく見る視野の広さが教員には求められる。【子どもへの配慮】

当該プログラムを通して、観光学部生には、プロジェクトを企画し提供するという立場からプロジェクトを振り返る様子が見られるとともに、学部教育においては子どもとの接点が少ないことから、教育学部生やリーダー会のメンバーという、知識と体験において、自らよりも子どもをよく知る他者から学ぼうとする姿勢が見て取れた。一方、教育学部生は子どもと自身の関わりの枠組みにおいて、教師なら、あるいは教師となるためには、どうあるべきかという立場から自らの言動を捉えている場面が多いように見受けられた。

いずれの学部の学生も、数日間ではあるが数十人の児童と寝食を共にし、活動において児童を指導し支援する立場に身を置くことによって、予想もしなかった事柄にも自ら考え対処しなければならず、社会で求められる柔軟な社会性と対人関係力を養うことにもつながるような、新たな気づきを得たことは確かであろう。

V. おわりに

本事業は観光学部においてはLIPプログラムに位置づけられているものの、従来のLIPと異なり、全学組織の事業の一つとしての背景を有する事業であった。また、学外の複数の機関や団体と連携を図る事業でもあった。本稿を通して3年間の事業を振り返り、次の諸点が確認できた。

第1に、学生の学びという点では、本プログラム終了後のレポートで、学生たちは夏旅を通して、自らの活動の姿勢や準備の在り方、児童への接し方などについて振り返り、反省すべき点を的確に指摘し、今後の改善点を明らかにしている。さらに、リーダー会の方々や他の参加学生の活動の様子からもさまざまな点を学びとっていることが読み取れた。加えて、他のLIPでは年齢が上の方々との活動が多い中、観光学部のカリキュラムでは経験しがたい、小学生という発達段階にある児童を主体とした活動は、この体験を通してコミュニケーションの図り方や安全面への配慮の重要性に気づく機会となり責任感も増したようである。中期目標の前文にあげられている「柔軟な社会性と対人関係力を養い」という点においても、学生

の今後に資する活動であったといえるだろう。

第2に、事業の目的設定に関する課題も浮き彫りになった。教育学部生の多くが自己の将来像である教師という視座から児童とのかかわりを捉える傾向にある一方で、担当教員の目に映った観光学部生の戸惑いは、本事業において、観光学部としての目的の明確化が十分ではなかった点を示唆している。今後、同様の連携事業をLIPの枠組みで実施する場合には、学部間連携事業全体の目的だけでなく、観光学部LIPの観点からも、独自の目的を設定することが望まれる。

最後に、アクティビティの内容と運営について一例を挙げ、今後の新たな展望も含め検討課題を示しておきたい。「夜学習」での天体観望会は、日高川町の自然の一部としての美しい星空を取り上げる機会になっていると同時に、日高川町が保有する望遠鏡機材を活用する数少ない機会にもなっている。しかしその機材を維持管理できる人物が町に不在で、当日に望遠鏡を運用できるのは実質的に中申だけであった。持続可能性の観点からは、望遠鏡を用いた観望会に代えて単に裸眼で星空を眺める「星空」観望会のみにする（これだけでも泉大津の子供達や参加学生にとっては価値がある）ことも検討すべきだろう。また最終年度以降、将来的にかかわる天文公園との連携も考えるのであれば、むしろ本プログラムとは別の観光・教育共同プログラムを立ち上げる、あるいは日高川町が主体となって（和歌山大学の関係教員が監修する形で）例えば星空案内人資格認定講座²を開催して郷土教育に役立てるなども考えられる。

この問題は学部間連携の観点から捉えることもできる。この3年間を通じて多くの教員が本事業に携わり、夏旅を支えてきたといえるが、他方、プログラムの持続性を念頭に置くならば、関与する人員が多く、従って担当者の変更される機会が増えることにもなるため、いかに属人性を減らすか、が課題になると考えられる。これは観点を変えると、ごく限られた教員の力量に依存してしまうことの懸念にも通じる。しかし、誰でもが担当できるようなマニュアル化が可能かという点、部分的には可能かもしれないが、プロジェクトマネジメントで一般的には言われるように、これは難しい。逆に言えば、本事業を実践研究と考えたとき、プロジェクトマネジメントの理論から見た本プログラムの分析を行うことは、一考に値するのではないだろうか。

本稿では、観光学部としては従来のLIPとは運営や内容面において異なる経験となった本事業の3年間を振り返り整理することによって、当該事業の運営・運用のあり方や参加学生の学びを確認することにつながった。さらに、観光学部の視座から学部連携事業におけるLIPを捉えるとき、LIPとしての目的の明確化に関しても課題が明らかになった。今後、同様の連携事業が実施される際に、この点が活かされるよう本稿において共有しておきたい。

謝辞

大阪府泉大津市および和泉市、和歌山県日高川町およびかつらぎ町の教育委員会や関係の皆様には多大なるご協力を頂いた。和泉市およびかつらぎ町のリーダークラブの皆様には、和泉市・かつらぎ町プログラムの実施に際し、ご指導並びにご助言等多くのサポートを頂いた。きのくに中津荘および和泉市立青少年の家槇尾山グリーンランドには開催場所をご提供頂いた。最後に、本事業の実施母体は教育・地域支援部門であり、実施に際しては同部門および教育学部の教職員の皆様にお世話になった。ここに記して感謝申し上げたい。

引用文献

- 和歌山大学観光学部（2017）『和歌山大学観光学部10周年記念誌』
- 和歌山大学観光学部観光実践教育サポートオフィス（2019）『2019 地域インターンシッププログラム活動報告書』
- 和歌山大学教育・地域支援部門 教育学部・観光学部（2018）『平成29年度「体験教育旅行&夏学習」「地域支援学校」研究報告書』（通算1号）
- 和歌山大学教育・地域支援部門 教育学部・観光学部（2019）『平成30年度「体験教育旅行&夏学習」「地域支援学校」研究報告書』（通算2号）
- 和歌山大学教育・地域支援部門 教育学部・観光学部（2020）『2019年度「体験教育旅行&夏学習」「地域支援学校」研究報告書』（通算3号）

注

- 1 案内チラシのタイトルは「2019年度教育実践による地域活性化事業フォーラム・体験教育旅行&夏学習（夏旅）報告会」、主催は、和歌山大学クロスカル教育機構 教育・地域支援部門及び和歌山大学教育学部、後援は和歌山県教育委員会。これまでも実施されていた同フォーラムに、2019年度は夏旅も参加することとなった。
- 2 <https://sites.google.com/site/hoshizoraannaishikakunintei/> [2020年8月25日確認]

受理日 2020年6月25日